

山腹の煙突から吐き出される煤煙が、耐え難い冬が間近に來ていることを知らせる寒い曇空をもつと暗くしていた。

煙臭い町は朝の一寸の間だけ賑った。長屋という長屋から、タガネを下げた男や赤子を背負った女房が坑内^{しき}や撰^{しき}鉞場に向った。鉞夫たちは仲間に出会わすと一寸顔を上げた切りで、鉞夫特有のしっかりした足どりで黙って通り過ぎた。いつもの元気な挨拶の聲は聞かれなかった。疲れた青い顔をした鉞夫たちが坑口から上つて來た。その陰気な疲れてボンヤリした顔の坑夫の長い列はノロノロと町に這入って來た。朝らしいものは何処にも見られなかった。

朝の交代の後、町には溝の流れに浮いた飢えた家鴨の寒寒とした声だけが残った。寒い風の中に土釜色の皮膚をさらけ出した山と山との間に、ボロ屑のように撒きちらされた町はひっそりとなった。半時もすると今度は子供たちが蟻のようにあらわれた。子供たちは町を貫き流れている川に沿うて下り、町端れの橋を渡り、町からはやや高く、禿山の裾に、黒い汚点^{しみ}のように小さく見える学校に向い、糸屑のように見える急勾配の坂を上って行つた。

流し元で何かコソコソいう音がした。

「八十治、何しているなが」

押入をあけて冬支度のボロを探していた母親のお幹は神経質に叫んだ。

流し元はひっそりとなつた。朝と昼はこの頃薩摩芋で間に合わせていた。朝一家六人でそれを食うと昼間の分は幾らも残らなかつた。お幹は尋常一年のお米とまだ学校に上らない百治とが喜んで食う様子を見ることで、自分の空腹を我慢する日もあつた。それがこの頃になつて戸棚に残して置く芋がいつも不足して居た。お幹は八十治の弁当がわりにタツプリ芋を包んでやつていた。が八十治は何時の間にか芋を盗んで行つた。その上学校から帰ると猫のように塩引の切目を掠めて行つた。お幹はそういう八十治を理解出来なかつた。手に負えない貪慾としか思えなかつた。また流し元へやつて来た音がした。

「何時まで学校さ行かねで何してる」

「何もして居ねえ」

そう言う声でまぎらわしてソツと戸棚を明けるらしかつた。お幹はカツと腹が立つた。

「畜生、まだ愚図愚図しているがッ、乞食犬、餓鬼ッ」

叫びながらお幹は乱暴に障子を明けて追いかけた。

八十治は三つ四つの芋を手摺みにした儘、二三町の間夢中になつて走つた。

やがて走るのをやめてゆっくり歩きながら芋を食いはじめた。芋は「坊っちゃん」たちに奪られるに決つて居たから、八十治は学校の途中で出来るだけ食つて了うことにしていた。そのうち八十治は急に悲しくなつて来た。母親に怒られることには馴れて居た。が今日のように腹からの

怒りと憎しみを籠めた声は初めてだった。八十治は家を追い出されたような悲しみで一杯になった。

不安な眼をキョロキョロさせながら八十治は「坊ちゃん」たちの眼から逃げて歩いて居た。やつと鐘が鳴った。子供たちの群は幾筋もの縞をつくりはじめた。整列しないうちに列に加わったが最後、ひどい目に遇う。そこですっかり整列してから八十治は列に這入った。

坊っちゃんが居た。そのすぐ前に八十治はソツと飛び込んだ。まだ「気をつけ」の号令まで一寸間があった。がもう八十治の背中では恐ろしさの予感で丸く縮み上って居た。

「ゲホ（お凸の事）芋持って来たか」

八十治は返事のかわりに、垢で真つ黒な頸を亀の子のように縮めた。返事の如何に拘わらず、蹴るか、殴るか、捻じ上げるかに決って居たから返事はいつも後廻しにして居た。

「持って来たべせ、ゲホ、うむ」

が坊ちゃんの清次はそう繰返してギョツと八十治の右腕を捻じ上げた。肩が割れそうに痛い。八十治は体を曲げ、眼を閉じ、擬じゅと苦痛をこらえた。反抗すればイヤが上に痛い目に遇う。

で凝と辛抱した。あたりの子供たちの眼は一樣にそういう八十治の顔に注がれた。がどの眼も同情や反感のかわりに、ただボンヤリした鈍い光りを放って居た。清次の顔には勝ち誇った色が浮んだ。

「気をつけ」の号令が苦痛から八十治を救って呉れるまで八十治は我慢した。

一時間目の休み時間を、八十治は猫に追われる鼠のように他の教室にかくれたり、寒い校庭に逃げ出したり、やつと「坊っちゃん」たちの手から逃れた。二時間目に八十治はどうとうつかま

った。

清次は八十治の襟を捕えてグングン教室に引ッ立てて行って叫んだ。

「出せ、早く芋出せ」

清次の手下の良太郎がグイグイ八十治の垢で真っ黒く汚れた頸筋を押しつけながら促した。八十治はあきらめて紙に包んだ芋を出した。

「なんだ、タッタ二つか」

開いて見て清次は不服を言った。

「取られると思って食ってしまったべ。狡い奴だな、ゲホ、明日持って来ねばこれじゃ」

そしてゴツンと一つ喰わせた。

昼の鐘が鳴ると子供たちは芋を食いはじめた。子供たちは春頃ほっぼっから勃々ぼっぼっ弁当がわりに芋を持って来るようになった。今年になってから鉋夫たちの賃銀は三度も下げられた。事実上鉋山主から俸給を貰って居る校長はこの極度の窮乏を緩和する義務があつた。「芋をもつて来ることはちつとも恥しい事ではない」という校長の訓話で子供たちは誰も彼もそうした。子供たちは始め喜んだ。ポロポロの南京米より遙かにうまかつた。が段々にそれがゴツゴツ咽喉につかえるようになった。以前の弁当が恋しくなつたが、もう母親たちはそうして呉れなかつた。しかし子供たちは飢えていたから口の周囲に黄色い粉をくつつけながら一心にむさぼり食つた。

八十治はいつも昼間食う芋が無かつた。八十治は皆の食う様子をうらやましく思いながら、階下の雨天体操場に降りて行った。其処には弁当を持って来ない子供たちが多勢集つていた。

皆は空腹の不平のやり場に困つた顔をして散り散りになつて居た。ガランとした運動場は寒か

った。直き子供たちは床板にチョークで書いた土俵に寄って来た。空腹と寒さをまぎらわす手段は一つしか無かった。

車座になった子供達は一人ずつ土俵の真ん中に飛び出した。二人からだをぶっつけ合った。勝った子供が土俵の中に残った。負けた子供は車座に戻り、次の子供が飛び出した。六年生の土俵の中では音松が一番強かった。

「ほら、来た来た」

叫びながら音松は次から次と負かした。音松は空腹を忘れることが出来た。が負けた子供は座に戻ると同時に、運動した反動で寒さと空腹に堪えられなかった。すべての慈愛から見はなされたようなたよりない表情が皆の顔に浮んでいた。八十治もその一人だった。

鐘が鳴った。弁当をつかった子供たちが騒々しくなだれ込んで来た。車座の周囲には垣が出来た。垣の中から清次が呼んだ。

「ゲホ、負けてばかり居て駄目だ、こっちや来い」

八十治は襟を掴んで後へ引ッくり返された。役人の子は鉦夫の子と遊ばなかった。「坊っちゃん」たちは、いじめてやろうと思う相手が、鉦夫の子供たちの多勢の団体的な遊びの中に居るときには手を出さなかった。清次がこの習慣を破ったことが八十治を気強くした。八十治は起き上りざま相手の膝を蹴った。

蹴られた清次は神経質な怒りで相手の横面をはった。車座になった皆の顔は自分たらの大将である音松に向けられた。

「何してそんなひどい事をするッ」

音松は仁王さんのように顔を赤くして叫んだ。がその様子にはどこか、役人に対する鉦夫たちの無智な畏怖いふと同じ種類の相手を恐れて居るところがあつた。力では清次は音松の敵では無かつた。が他の坊っちゃんたちが清次に加勢した。それに反してこうした種類の喧嘩に馴れて居ない鉦夫の子供たちは怯々おそおそとした眼でボンヤリ見て居た。それでも音松は負けては居なかつた。がその顔には坊っちゃんたちに喧嘩を売つたことに対する理由のない後悔と恐れが表われて居た。音松の努力は相手を挫く努力から自分がペシヤンコにならない努力に變つて居た。清次は其処につけて込んで相手の鼻をイヤという程下から突き上げた。

サツと音松の上唇が血で染つた。

二

「さあ、みんな、こつちさ来て並べ」

お雪はキンキン響く声で叫んだ。働く上で男も女もないこの町では特に女の言葉というものが無かつた。ただその甲高い声音だけがお雪を男の子から区別していた。

横に二列に新聞紙を敷き並べた上に女の子たちは並んで坐つた。虱の居ない「坊っちゃん」と「嬢ちゃん」たちが、学校道具を肩にさげたまま物好きそうな眼を動かしていた。

その一人がお雪に叫んだ。

「級長だとして生意気たけて、せば、お前に虱居ねえてか、なんぼでも居るべせ、見てやるが」
「あい、うたて、知らねえ」

お雪は男の子の手から素早くスリ抜けた。

教師の初江が這入って来た。見物の子供たちは廊下へ逃げた。そして硝子戸を開け、首をつき出し、騒々しく冗談口をきいた。

初江は先ず虱の居る子供に手を上げさせた。殆んど全部の手が上った。四人残った。初江は近づいて一人一人の髪を分けて調べて廻った。昨日あたり洗ったらしく、綺麗な毛の子供も居た。が虱の居ないのは二人だけだった。二人だけ列から退けて全部髪を解かせた。お雪が髪を解くのを手伝って廻った。大部分は汚いボソボソした毛だった。指を突っ込んで一寸毛筋を分けて見ると、まるまると太った虱が鈍い足であわてて毛のなかにかくれ込んだ。

それは初江の提案でこの春からやり出した事だった。が初江は、鋤夫の生活がよくなる限り虱は絶えないということを五十治に聞かされてから、イヤになって了っていた。校長はこのことを喜んでいた。初江はいつも不愉快な自縛じじょうばく自縛を感じて居た。

お雪は自分の仕事が済むと列の端れに行つてチヨコンと据った。初江はお雪の頭から順々に黄色い粉をかけ、両手でゴシゴシもみ込んで廻った。

その上で初江は教壇のテーブルに行つて、風呂敷包みから五十治から借りて来た「労働組合の歴史」というパンフレットを取出して読み始めた。黄色い粉が虱を殺すまで五十分の間があった。十八世紀の後半から十九世紀の前半にかけて、産業革命は小規模の家内工業を大規模の工場組織の機械工業に変化させた。其処から賃金労働者が生じた。資本家と労働者の利害は明瞭となり、労働力を売ることに以外一切の生産手段を失った労働者に残されたものは自分達の団結力と組織の力で生活条件を改革して行く一つの道だけとなった。読んでいるうち初江は文字の意味だけはど

うやら分つた。が初江の脳裡には五十治たちの事が浮んだ。五十治の長屋に集つて鉦山の苦情を言っている坑夫たちのことが浮んだ。五十治たちがどうして生活条件を改革して行くのか。初江はその疑問をパンフレットが解決して呉れることを願ひながらドンドン読み進んだ。が何時かしら文字だけが眼先にチラチラして、意味が何処かへ逃げて行つて了つて居ることに気がついた。

初江の頭には昨日の職員會議のことが往来し始めた。校長はこの頃児童の間に、ハイカラという弊風が生じたと言つた。お負けにそれが初江の責任でもあるかのように、初江の方ばかり見て言つた。初江は驚いて何ういう意味かと訊いた。校長は子供が洋服なぞ着るようになったのがそれだと言つた。初江は夏から秋にかけ、綺麗な洋服を着て来る「嬢さん」以外にもズダ袋のような手製の所謂洋服を着て来た子供のあつたことを思い出した。校長は更に子供たちが毛を切るようになったことを指摘した。そしてこれは初江が独断で奨励した結果だという意味をほのめかした。

初江がこの春奉職して以来、一年と二年の子供の間におかっぱの子が二人三人とあらわれた。それが忽ち流行して夏までには一二年の子供の殆ど全部がそうになった。初江はこの変化に驚いた。初江はこの現象が自分が風とりを初めた事と関係のあることに気付いた。がそれは初江がそれをすすめる口吻を漏らした結果ではなかつた。それは坑内しきやト口押しや採鉦場で働いて居て、子供の頭を洗つてやったり、虱をとつてやったりする暇のない母親たちの余儀ない必然が生んだものに違ひなかつた。

初江は秋になつて突然一二年の受持ちから五、六年の受持ちに変えられた理由にそのとき気がついた。同時に初江は校長の態度から自分が五十治たちと往復していることに対する反感を感じ

ずには居られなかった。初江は今あの眼鏡のかげに卑屈にチラチラして居る校長の眼を思い出していた。

「雪さん、さあ、はじめて」

初江は教壇を降りて促した。初江とお雪の二人は、床に敷き並べた新聞紙に俯向けた子供たちの頭を両手でゴシゴシ揉み出した。汚れた毛の臭気が鼻を突いた。ハチ切れそうに肥った虱が、パラパラと雨粒のような音を立てて新聞紙に落ちた。

老人のようなカサカサした、脂気のない、血色の悪い子供たちの皮膚には毛ば立った襯衣シヤツの裏のように垢が浮いて居た。その皮膚に無数に食ツついている虱を、雑巾のような着物を通して初江は想像した。虱取りが終ると、子供たちは二人ずつ組になってお互いの髪を結び合った。

初江は校舎の裏の狭い空地に出て行った。手にさげて来た虱の這入った新聞に燐寸マツチをすって燃やした。赤い焰をあげて新聞紙が燃え立つと一緒に、むかむかするたまらない臭気が立った。初江は思わず飛び退いてボンヤリ山の下の方に眼をやった。

其処からは鉾山やまの全景が見下ろされた。左手と正面との山にはそれぞれ二つ宛の採掘場があった。学校の同じ山続きには平地から段々に山腹に這い上った撰鉾場があった。この三方の山の底に薄汚い長屋の群を連ねた町があった。町は右手の山の奥から流れて来る川に沿うて一方だけ地形のややひらけて居る西の方に延びていた。長屋の列が尽きるあたりに、鉾山の関門を為す門衛の居る小屋が白い豆粒のように見えた。精錬所は正面の山の煙に、造作が煤煙の為めにポロポロに腐った真ツ黒な姿を見せていた。セメントの巨大な土管が熔鉾炉から出発してうねりを打って

山の腹に這い上って行き、それが中腹まで達したところで、突然恐ろしく太いその癖真中からへシ折れたように不恰好な短い煙突となって、その尖端から濛々と黒煙を吐き出して居た。山は黒煙が外界に漏れるのを防ぐ屏風の役目をつとめていた。煙は外に流れ出たがって一旦、山のふところ低迷して居るが、やがてあきらめて町の上に逆流して来る。鉦夫たちはシキからオカに上っても太陽を見ることが無かった。鉦夫のすべては眼と呼吸器を悪くしていた。風の吹き廻して、四方に立ちほだかつて居る山の中に閉じこめられた煤煙が猛然と襲って来て、ムンムンいう悪臭の中に男も女もゴホンゴホン咳き込んだ。この不恰好な煙突のおかげで会社は煙害賠償を免れていた。

山は永い歴史をもつて居た。旧藩主の手から日露戦争後まで地方の資本家の手に経営されていたのが、その後新山財閥の所有となった。鉦夫の父親も祖父も鉦夫であった。その祖父たちの封建時代の奴隷としての伝統を、地理的な外部社会との杜絶が立派に保存して居た。三方を険阻な山に囲まれ、僅かに展けた一方に向って歩行も困難なト口路づたいに四里先の町から、燐寸箱の様なポツポに一時間も乗らなければ鉄道本線に達しない不便は、この町と他の社会との交渉を自然に遮断して居た。新山財閥はこの地理的な他の社会との隔絶と、封建時代の奴隷的伝統を利用することを忘れなかった。鉦山の入口には門衛を置いて鉦夫の出入を嚴重に監視した。で鉦夫たちは賃銀が他の鉦山の半分を出でないに拘わらず不平を言うことを知らなかった。県庁の役人と視察者は倶楽部で御馳走をして追い帰り、修学旅行団は嘘で丸め、あやしいと見れば門衛は外部の人間を入れなかった。好況のために鉦夫の増員を必要とする場合には、附近の農夫を狩り集めてそれに充て、よりよい条件で労働して来た渡り鉦夫は絶対に使用しなかった。鉦夫の奴隷的な

屈従と無智はかくして完全に保存された。鉦夫たちは日常の会話に上下のことを上磐下磐と言い、東西南北、左右はカミシモの二句で間に合わせた。大部分の鉦夫は東西南北の觀念をわきまえなかつた。

初江には眼の下に構つて居る煤煙に黒々と汚れた長屋の連りの底から、五十治たちが言うようにやがて生々とした力が湧き上つて来るとは容易に信じられなかつた。初江は五年前、この町の長屋から出た後にも先にもただ一人の女学生としてA市の高等女学校に入学した。二年目の夏に帰省した初江は、それまでN町から発行されて居る文芸雑誌などを読んでいた五十治が、なにか六つかしい翻訳や著書を読んでいるのに気がついた。一方五十治が文芸雑誌を読んでいる頃既にそういうものを知つて居た岩蔵は、あちこちの鉦山で労働運動をして居る小山隆一を、門衛や事務所の役人をいい加減な口実で誤魔化して、しきりに坑内を案内して歩いてきた。初江は三年目の春女学校の寄宿舎で、小山隆一を一週間自分の長屋に置いたという理由で岩蔵が鉦首かくしゆされ山を追放されたという五十治からの消息を受けとつた。その年の冬、五十治や岩蔵の手に依つて、若い鉦夫たちを主とした鉦夫組合が出来、追放された岩蔵は近くの町に根拠を置いて、内外呼応して組合の拡大を図つて居ることを知つた。

五十治の変化を、すべての事を微笑で受け入れて居るような善良でおとなしいその性質と引き較べて、初め初江は不似合なことに思つて居た。が五十治の熱心さは変らなかつた。五十治は暇さえあれば鉦夫たちを捕えて、組合の性質を説き加入をすすめて居た。五十治の周囲には若い鉦夫が多勢集つて居た。が初江はその集合が単なる寄合としか思えなかつたし、何時になつたらその組合に依つて新しい生活条件が齎もたられるのか理解出来なかつた。それはズツと遠い将来のよ

うにしか思えなかった。今年になって三度の賃銀値下げがあった都度、問題化しようとする鉞夫たちを五十治はただ笑って済ませていた。

風の加減で眼の先が急に曇ってムツという煤煙の臭が襲って来た。初江はその煙りの底に沈んだ陰気な町に光りの射す日を考えることは、一寸出来ないような気がした。

初江は雨天体操場を突っ切って職員室に這入って行った。窓際まで行って初江はハツとして立ち止った。何処にも自分の机が見えなかった。

初江は其処に一人残って居る校長を見た。校長は初江の視線を感じながら俯向いて擬ヅとしていた。その顔にはなにか隠して居るのが露骨に感じられた。校長が自分の机を片づけたのだ。初江は烈しい屈辱を感じて思わず顔を赤くした。

初江は昨日の職員会の有様をまた思い出した。

「中村さん」

突然校長が呼んだ。初江は怒りをかくし切れない顔を振り向けた。

「昼間あなたの受持の子供が喧嘩したでしょう。ああいう事は注意して貰いたいですな。これまであんなことは無かったですから」

鼻血を流した音松を世話した初江は、事の起った理由を聞いて知って居た。初江は昂奮で顔を赤くしながら強く言い返した。

「でも、坊っちゃんたちが他の子供をいじめるからでしょう」

言って了ってから初江は、もうこの学校に居るのも永くはないと思った。初江は職員室を出て隣りの会議室から順に見て廻った。宿直室に自分の机があった。それはいやがらせて自分から退

職させる爲めにした事に違いなかつた。

初江は学校の前の急勾配の坂を下りて行つた。職員会の様子、校長の眼、他の職員たちの明らかに自分を避けている態度、清次と音松の喧嘩、それ等のものが初江の脳裡をしきりに往来した。初江は其処に二つのものの争いを感じた。と初江の胸には、先刻町を見降ろしながら、容易に何事も起らないだろうと考へたこととは全く別な考へが浮んで来た。もう此処にも芽がふき出して居た。

三

その日の夕方、若い鉦夫たちは初江の長屋に集まっていた。非番の鉦夫たちは毎夜のように五十治か初江かどつちかの長屋に集る習慣だつた。みんなは市の女学校を出て来た初江の、自分等に耳新らしい言葉やその言葉で話される知識に耳傾けることを好いていた。

この頃各採掘坑の見張部屋に現われた小頭について皆は話し合っていた。これまで坑内は見張部屋の役人だけで面倒な問題が起らなかつた。それがこの頃になつて各見張部屋に三人四人と得体の知れない小頭なるものが現われた。彼等はハツパ小屋で油を売ったり、若い女坑夫をからかつたりする外には実際上の仕事は何もして居なかつた。

「それだよ、皆きいてくれ、今日芳三郎から岩蔵の手紙が届いて居たんだよ」

五十治はポリポリ太い指先で南京豆の皮を潰しながら、人なつツこい眼で皆を見廻した。山と町の間の車夫（トロ押し）の芳三郎は五十治と組合本部の岩蔵との間の伝令をして居た。

「あの小頭という奴はな、ツイこの間まで赤山炭坑に居たならず者の棒頭どもなんだ。言葉つきなんかでもここいらのものでないことは分るべせ。こいつ等は最初傭夫ようふとか何とかの名目で炭坑の組合の切崩しにやとわれて居たども、あの組合は中々そんなことでは駄目だったべせ。其処でせ、奴等は唯無闇に乱暴を働いたり飲んだくればかり居たもんだから、炭坑でも警察でも困つてしまつて仕舞に追い出すことになつたなや。其処へ眼をつけて此処へ引つ張つて来たのは誰だと思ふ。あの市の山師の栗山だや。此処は外と違つて役人ばかりで間に合せて居たべや。恰度うツてつけだったなや。市の羽後時事の木下つて新聞記者から岩蔵さ知らせて来たツて話しだ」

五十治は気持ちよく響き渡る声で笑つてから、お上（鉦山主のこと）が小頭を雇うに至つた理由について話した。お上は五十治たちの組合が今のところ微力であること、表面上何の問題も起さないことで歯牙にかけなかった。が一方お上は鉦夫や女房たちの全般に安過ぎる賃銀と購買部に対する実際上の非難の声の起つて居ることを知つた。この非難と憤懣は当然組合の利用するところとなつて、それを拡大し勢力を強めるものであつた。そこで当然何等かの問題が、遅かれ早かれ表面にあらわれるものとして、予め暴力を用意したのだ。この暴力団はまた、どんな種類の口実でも捕えて組合を叩き潰すことを待ち望んでいるに相違ないから、つまらない口実を与えるようなことを警戒しなければならぬ。

五十治は話しを初江の事に移した。

「自分の方から退職するように仕向けて居るなだ。このことでもお上が俺達に注意して来たこと分るべせ。今までは馬鹿にして居たどもな」

皆の眼には微かな輝きがあらわれた。

「先生とこ、やめさせるて」

「会社の御用をつとめてる学校だからせ」

今年検査を終えたばかりの喜七が言った。

「先生とこやめさせるようだったら、餓鬼ども学校さやらねえようにしたらいいべせ」

皆は昂奮した。校長に対する感情的な非難を、一時的に満足させる言葉が賑やかに交わされた。初江は皆の話しの調子から自分に対する好意と信頼を感じながら言った。

「そんな事しても何にもならないすべ」

頬がこけ、眼の鋭い、がっしりした体つきの芳松が息せきながら這入って来た。

「お前方、聞いてけれ」

皆は芳松の方を振り返った。

「音松がせ、営業課長の息子の清次と喧嘩してな、今事務所にとめられて居るんだよ」

役人たちの舎宅は町から一段と高い、山の麓の傾斜に建てられていた。其処からは町と鉾山の全景が眺望された。が子供たちにとっては遊び場に欠けていた。鉾夫の子供たちとは遊ばない

「坊っちゃん」たちも、ベースボールをするようなときは、勢い汚いゴミゴミした町に降りて来なければならなかった。鉾山事務所の建物と精錬所の間の空地は、鉾夫の子供たちの遊び場であった。がそれが自分の父親たちの居る事務所に続いた地域であることを楯にとって、「坊っちゃん」たちは必要に応じて鉾夫の子供たちから其処を占領することが出来た。

芳松は弟に対する兄らしい感情に動かされながら、事のあらましを話した。坊っちゃんたちが其処にやって来たとき音松たちが野球をしていた。音松はいつもと違い彼等の請求に応じなかつ

た。頑として動かないのを知ると、坊っちゃんたちは仕方なしに見物して居た。妨害が始まった。飛んで来たボールを清次が握って離さなかった。音松は「皆してかかれッ」と叫びながら清次の方に突ツかかつて行つた。その勢いに恐れて坊っちゃんたちは逃げた。清次一人が下駄を脱いで振り廻わした。が洗足はだしの子供たちは四方から群つて来た。清次は音松に殴られて泣き出してつた。其処へ鉾夫を初年兵のように取扱うことに得意を感じている上等兵上りの事務所の小使が出て来て音松を捕えた。小使は清次の父親の営業課長のお覚え目出度くあり度い為めに、音松を散々殴つた上でまだ引き止めているのであつた。

「俺アよつぽど殴り込みに行つてやろうと思つたがやめた。音松は今日学校で精次と喧嘩して負けて来たからせ、坊っちゃんどもが二人も三人もかかつて来るのに、一人でやるから負けるなだ、お前達は向うがグルで来たなら、此方も一緒になつてやることを知らねえ馬鹿だツて、俺あ言つてやつたべせ。そうしたらやつ、馬鹿だからすぐ喧嘩したもんだ」

芳松は初江の方を向いて言つた。

「大儀だども先生行つて来てたもれせ、受持の先生行つたらすぐ渡して呉れるべから」

芳松はどうに母を失つていた。父親はシキから上つて来ていながつた。芳松は何よりも自身で行つたときの感情の爆発を恐れた。それでなくても睨まれて居る自分が、この事でかけ合いに行くのは不利であつた。

初江はすぐ立つて袴をつけた。初江は仲間の為めにする機会を待ち望んでいた。それが今来たことが初江を喜ばせた。

五十治が言つた。

「俺たちも小さいとき坊っちゃんたちによく虐められたもんだ。みんなもそうでなかったか。校長が言ったってよ。こんならこと今までなかったって……これからは、こういうことあれば、餓鬼どもだって黙って虐められて居ねえべせ」

四

ランプが天井からボンヤリ鈍い光りを放っていた。

坑は頭が支えそうに低かった。芳松は窮屈そうに身をかがめ、「心にハンマーを揮って居た。首筋は油を流したような汗で光り、襯衣の背中には汗のシミが出て居た、シミは見る見る背中一杯に拡って行った。

振り上げる度、磨滅したハンマーの尖端がキラキラと輝いた。そのタガネを打つ音が快く響いた。僅かに身を入れる余地しか無い中に、汗の香と鉋屑から発散する異様な臭気で息詰るようだった。水に漬った足は気持ち悪くふやけて居た。

指の太く短い頑丈な拳がタガネをガッシリ握って居た。それが微かに憶えながら、タガネと一緒にズシズシと鉋屑の屑に少しづつメリ込んで行った。いい加減それを続けると、芳松はタガネを穴から抜き出し、指を突っ込んで粉末をかき出した。微かな粉がキラキラ輝きながら飛び散った。それが終わると芳松はまたハンマーを振り上げた。

幾つかのハツパ穴を掘り終ると芳松は道具を下に置き、古紙のような鉢巻を脱し、グルグルと頸筋を拭いた。体に浴びた鉋屑の粉を払い落した。そして今度は鉢巻にせず頸に巻いた。

「チエツ」

ハツパ（ダイナマイト）の一方の切口の紙を破って一寸舐めて見ていた芳松は眉をしかめて舌打ちした。粗悪なハツパだった。また不発で小屋まで貫いに行かなければならないかも知れない。芳松は導火線の尖端の雷管をハツパの一方の切口にメリ込ませ、反対の切口の紙を破りとった。ハツパ穴からはみちびの尖端が少しずつ顔を出している。初めのはうまくついたが、五つ目が何うしても点火しない。芳松は顔を近寄せ、強く息を吹きかけた。やっとの事でパツと赤い火の子が燃え出した。

他の一つは濛々と白い煙を吹き出し、赤い灼熱した一本の線となって、穴の中へひたすらに燃えて行つた。煙硝の臭いが鼻をついた。

芳松は馴れていた。ゆっくり其処に脱ぎすててあつたムジリ（一種の労働着）と道具をとり上げ、天井のランプを降ろし、頭を屈めて切羽を出て行つた。

「悪いハツパだなあ、あれだばなんぼかけても一尺四方も落ちれば精一杯だべ」

芳松はペツペツと薄黒い唾液^{つば}を吐き出しながら、其処に居合わせた五一郎と覚平に言った。

「ほんとだ、それはいいども不発の時には命がけだからなあ、お上では俺達の命など何とも思つて居ねえべ。百五十円出せばそれで済むこつたからなあ」

下に置いた瓦斯ランプの傍らに大の字に寝そべつた五一郎が答えた。

突然近くでハツパの爆発する物凄い音響が轟いた。鉱石が恐ろしい勢いで上磐下磐に跳ね返つたかと思うと、ゴーツと地中に籠つた不気味な音が永く尾をひいた。その動乱に押し出され、煙硝の臭いのする空気がサツと風のように此方に流れて来た。下に置いた三つの瓦斯ランプの火が

一様にチラチラと揺れた。芳松たちの影絵が彼方此方に揺れ動いた。それが二発続いた。

「二発弾はじけたようだなあ」

近くの、積み重ねた坑木のかげから芳松の父親の兼松の声がした。

「うむ二発だ」

「お前何発しつけた」

「六発よ」

その声と同時に一層荒々しい音響が一発また一発爆發した。直き死んだような静寂が帰って来た。また兼松の気づかわしげな声があった。

「一発弾けねえようだな」

「うむ、あんたらハツパじゃ、中々弾けねえな当り前だで」

五一郎はハツパに使う巻線香の火を岩に小摺りつけて消しながら言った。

「政治のお父がせ、購買さ掛け合いに行かねばいけねえってたで」

「当り前だべ、稼ぎ賃は値切る一方だのに、品物はドンドン上るばかりでねえか、何処のお父もお母かも大こぼしだべせ」

覚平は起き直った。

「購買の吉右衛門を殴ればいい」

「そんな事して見なよ」

兼松は坑木のかげから口を入れた。

「碌なことにならねえべ。ここじや外と違って殴ったり蹴ったりするもの無いからなあ」

五一郎は腹立たしげに叫んだ。

「そだら、お父さんは何にも不平をもたねえて言うなが」

「不平はあるどもせ、お前たち若いもののように短気な真似は出来ねえべせ、昔から今まで不平はなんばもあつたが、其処を黙って辛抱して来たから丸く納って来たべせ」

「お父」

それまで黙っていた芳松は強く呼びかけた。

「お前の言ってることはあべこべだべせ。黙って辛抱して来たから丸く納って来たなんて、何処が丸く納って来たてが。食うもの食えなくなつて来たばかりだべせ。どんなひどい目に遇つても音も出さねえで来たがらこういうことになつたべせ。米の飯のかわりに芋を食つてよ、この頃じやお前の好きな酒も飲めなくなつたべせ」

「酒でもものめば不平も出るども、のまねば言うことも無いべせ。俺あこれだけ永生きして居る分、で有難いと思つて居るなだ」

「チエツ」

まだ四十にやつと手が届いたばかりで永生きと聞いて、芳松の唇は生物のように動いた。

「何言う訳か、まさかお父だつて自分ばかり永生きすればそれでいいと思つて居るわけでもなかべせ。外の娑婆では人生五十年とか何とか言つてるべせ。それがよ、此処では四十から上生きるものは何人も居ねえでねえか。当り前なら働き盛りの年だべせ。それが四十の声きくかきかねえに皆ハタハタと死ぬでねえか。それは何の為めだと思ふ。爺婆じいばあの代から地の底さ潜つて生きて来たおかげだべせ。お負けにここじや満足な餓鬼さえ生れたためし無いでねえか。お前が傑えらいもん

だつて言つてた初江さんが学校をやめさせられたなは何の為めだと思ふ、初江さんは学校さ上つたから傑いのでねえよ、向うが間違つてると思えば先生やめてもやるがら、皆傑いもんだと言つてるのだべせ。それだからよ、不平があつても黙つて居るといふことは一番いけねえ、みんなの不平を寄せ集めて、お上（会社）さ打ツつけるようにしねばいけねべせ」

「不平をぶツつけたつてお上（会社）の威光に何うすることも出来ねえべせ。お前方は氣が短かくていけねえよ」

「お父、お前達、俺たち皆で仕事を休んだらお上では何うする事も出来ねえ、結局こつちの言ふことを聞かねはならなくなるつて言つたら、それはそうだと言つたでねえか、忘れてしまったが、お前一人で事務所さ行つて、七重の膝を八重に折り曲げてもどうにもならねえことは分り切つて居るこつた。みんな一緒になつてやれば駄目だ。音松だつてもみんなでかかつたから清次に勝つたようなもんだべせ。……お前はそれとも事務所の小使などに音松があんなひどい目に会つても、それでも口惜しくねえのか、自分の息子があんな野郎にひどい目に会つても、え、お父」

暫らく返事が無かつた。がやがて兼松は鈍い声で呟いた。

「碌々ハツパ穴も掘れねえような若いものばかり集つて、何だ彼だ言つても、それで何うなるものでもなかべせ」

闇の中に芳松の眼がギラギラ輝いた。

「其処だよ、そこだから言つてるべせ。若いものばかりでも仕様がねえから言つてるべせ。お父は仲間でも一番の年寄りだ。お前の言ふことなら大概のものきくべせ。そだからよ、そだから組

合さ這入って一緒になつてやつて呉れつて言つてゐるなだべせ、お前さえその気なら、あと町のも
の全体這入つたも同じだからなあ」

坑木のかげで瓦斯ランプが動いた。兼松は無言のまま切羽を見に出かけた。入口のところ
で兼松はランプを下に置いて手拭でしつかりと鼻と口を結えた。その上で一寸中へ進みかけたが
また入口に引き返して来た。そして息子の芳松の方に向つて叫んだ。

「まだ這人らねえ方がいいべ」

白い煙が深々と立ち罩め、ムンと熱の籠つた空気はむせる程煙硝の臭いがした。煙くて眼を
開けて居られない。それに煙でランプが霞んで役に立たない。手さぐりで坑底に辿りついた。

其処はもう煙が抜けていた。二つのハツパ穴は僅か一尺か二尺ひろがつて居るに過ぎなかつた。
兼松はハンマーでゴツゴツ其処いらを叩き廻わして見た。全体にヒどの這入つた鈍い音がした。

突然、兼松はギョツとして立ち疎んだ。

すぐ近くで恐ろしい勢いでハツパが弾けた。一しきり、岸に砕ける怒濤のような岩石が崩れ、
跳ね返る音が轟いた。それに続く陰気に籠つた不気味な唸りが消えると、アトには死んだような
静けさが来た。

兼松は夢中で飛び出し、支坑から芳松のハツパをしかけた切羽にかけ込んだ。濛々と立ち罩
めた煙の中に、真ん中から割箸のようにヘシ折れた支柱に凭りかかり棒立ちになつて居る芳松の姿
が見えた。瓦斯ランプの光りが微かに芳松の鮮血に染つた横顔を見せた。

「芳松ッ」

叫びながら飛び込んだ兼松の足もとに、芳松の体は丸太ン棒のように倒れて来た。

見張部屋の電話のベルがけたたましく鳴った。

電話にかかった給仕の少年は一寸部屋を出、捲揚場まきあげばに向つて叫んだ。

「十一番」

「また怪我だろう」

役人は岩壁にかけてある「坑内傷害日記」を取つて机の上に投げ出した。それには毎日三、四件の軽傷、重傷、致死の事故が無造作に書き込まれてあつた。

五一郎が芳松を背負つて這入つて来た。いっしょに來た兼松は、恐ろしさの爲めに訳が分からなくなつた様子で、急に十年も老けふる込んだように見えた。

額を結えた手拭もシャツの胸も真っ赤に染つて居た。無残に碎けた芳松の政の半面から、背負つた五一郎の頸筋に絶間なく血がしたり落ち、それが更に下に流れ落ちた。給仕の少年はそれが点々と土間を濡らして行くのを物珍らしげに凝と見ていた。

「何処をやつたんだ」

役人は顔も上げずに訊いた。

「頭と胸だす」

「落磐か」

「なんの、ハツパの不発だす」

兼松の声は怒りにわなないていた。鋤夫たちがケージで上つて來た。部屋に這入つて來ると申合せたようにテーブ

ルの上にランプを置いた。テーブルの上は忽ちランプで一杯になった。その一つ一つ焰が同じようにチラチラ揺れ動いた。

「外へ出て呉れ、外へ」

役人は帳面から額を上げるとブリブリして叫んだ。が鉦夫たちの様子はいつもと違って居た。主人に叱られた犬のようではなかった。普段鈍くどんよりした鉦夫の眼は強いキラキラした光りを帯びて居た。若い学校出の役人はあきらめて仰向いて了った。

恰度這入って来た一人の小頭が、いきなり瓦斯ランプをグイと突きつけて、芳松の血みどろの顔を照らした。唇がひどく痙攣していた。

「またドジを踏んだんだな、しょうがねえ」

芳松は担がれて行った。

鉦夫たちはざわめき出した。

「ハツパが悪いからよ」

「不発ばかりじゃねえか」

「命なぞどうでも安いハツパを使った方がいいって言うなだべせ」

「命が百あったって足りねえせ、こんならハツパで仕事出来るてか
言いながら「人が、一本のダイナマイトをテーブルに投げ出した。」

「どれ貸して見な」

小頭は取り上げて一方の切口の紙を剥がしてベロリと舐めて見た。

「これが悪いって言やがる、こりや上の部だぞ、悪いって言うなら仕事をよしたがいいだろう」

鉦夫たちの顔には急に引き緊った表情が浮んだ。

「お前にハツパのよしあしが分るかよ」

「一人や二人仕事を止すのとは違うで」

「みんな休んだら何うする気だ」

「一人で引き受けるつもりだろうよ」

五

初江は購買に向つて急いだ。霰みぞれになりそうな寒い夕方であつた。溝の流れに家鴨の声が寒々と響いた。初江の足もとから鶏が鳴きながら逃げ出した。鉦毒で食うものの無い鶏どもは痩せていた。それが鉦夫たちの生活がドン詰りに落ちるに従つて、一層痩せたように見えた。絶間ない無益な争いで毛が抜け、筋張つた頸の、あわれな様子の鶏どもは飢えた眼を鋭くしてウロウロ歩き廻つた。けたたましい争いが起つた。二番大きい鶏が貪慾な眼を輝やかして餌を啣くわえた鶏の背に鋭い嘴を突き立てた。一群の鶏はそのすきに、落ちた餌に向つて殺到した。が争いが結局何物も自分等に齎さないのを知ると、鶏の群は絶望的な眼をして四方に散つた。

川岸の購買部の五燭の電燈の下に鉦夫や女房たちの黒い姿が群つていた。

「三等米なんぼだべ」

と一人の女鉦夫が言った。朝鮮米や台湾米をぶちまげた米にも等級があつた。

「相場が上って恰度になったよ」

主任の吉右衛門が言った。女房たちは何かブツブツ言い合ったがすぐやめた。帳面とメリケン粉の袋をブラ下げた姿で、そうして待っているうちに値段が下るとでも言ったように黙り続けた。初江の姿を認めると、女房たちは皆丁寧に頭を下げて挨拶した。免職になった初江に対する訳の分らない恐れと、ひそかな同情とが、それ等の消されない顔の一つ一つに浮んだ。

「三等二升呉れせ」

其処の板の間に腰かけていたおつぎは言った。

「帳面切れだねか」

吉右衛門は取り合わず女房たちの方を向いた。

「さあお前方持つて行くなら早くせ」

が女房たちは黙っていた。

「そだら薩摩芋呉れせ」

おつぎがまた言った。返事が無かった。がおつぎは別段気にもしない様子で、キョロキョロあたりを見廻わした。その顔には、拒まれ虐められることに馴れて居るものに特有な硬化した表情があった。

おつぎは初江を見つけるとピョコンと頭を下げた。おつぎはこの夏に父親が肺病で死ぬと同時に学校をやめて撰鋳場で働いていた。岩片で頭を打たれ脳膜炎を起し白痴になった母親は、井戸に落ちて死にそうになって以来、座敷牢に入れられていた。事務所では生活能力無いものと見做して長屋立退きを迫った。或る日とうとう畳を剥がしにかかった。両隣りと近所の鋳夫がかけつ

け、おつぎが撰鋤場で働くことになってやつと梟けりがついた。おつぎは白痴の母親と二人の弟を抱えて働き続けて居た。母親は牢の中を獣のように四つ這いになって歩き廻っていた。まだ四十前というのにすっかり白髪になって居た。箸を置くとすぐ食ったことを忘れた。三十分経つと母親は食事を求めた。

女房たちの数は段々ふえた。先から居る女房は、後から来た女房に何か呟いた。

おつぎはまた言った。

「なんばでもいいから、薩摩芋呉れせ」

「帳面切れになって居るべせ、何度言うのか」

吉右衛門はうるさげに言つてそっぽ向いた。初江は思わず前の方に体を動かした。

「少しでもやればいいねしか」

「それが出来たらいいどもせ」

吉右衛門は空うそぶいた。右の方の壁際に十俵程積んである芋俵を振向き、初江は上釣つた声で言った。

「こんなにあるもの、少しばかりやつてもいいすべ」

女房たちは一セイに内心恐れて居た初江の方を見た。自分等の言いたい言葉を初江の口から聞いたことが明らかに女房たちを驚かした。

騒々しい囁きが起つた。

拒まれたことに別段悲しさも感ぜずポカンとして居たおつぎは、初江の声を聞きその上気した顔を見ると一緒に、急に悲しくなつて来た。とそれまでかたくせき止められて居た感情が、恐ろ

しい勢いでおつぎの胸に湧き起つて来た。

キラキラ光るものがおつぎの眼にあらわれた。顔が歪んだ。おつぎは立上った。

土間は女房たちや鉾夫で一杯になって居た。おつぎはしやくり上げながら、その間を掻きわけ
て出て行った。ざわめきと赤子の泣き声が混り合つた。

吉右衛門は叫んだ。

「品物いらなかったら皆帰れ、用のないもの帰れ」

重々しい沈黙が来た。女房たちは一セイに吉右衛門を見た。吉右衛門の眼がキラキラ不安な光
りを帯びた。

突然一つの声が静けさを破つた。

「糞たれ爺」

吉右衛門は知らぬ顔をした。彼方此方から声が飛んだ。

「乞食爺」
ほいと

「米の値下げやがれ」

「慾たかれ爺」

「帰るも帰らねえも此方の勝手だべせ」

初江の周囲には、何時か憤りに満ちた顔が群っていた。

それ等の顔は何か言わずには済まされなことを物語っていた。初江は驚きに打たれて自分の
周囲を見た。ある昂奮が其処いらに漲っていた。初江はそれと一緒に、後から後から押しかけて来た。初江
分を見出した。誰も其処を動こうとしなかった。女房たちは後から後から押しかけて来た。初江

の体は何時かギツシリ周囲から押しつけられていた。後から押されて少しずつ前に位置を変えて
いることが分った。女房たちは騒々しく眩き合った。烈しい叫び声が彼方此方から聞えた。初江
は周囲の様子が数分前とがらりと変ったのを見てとった。その思いがけない変化が初江を驚かし
不安にした。その中には五十治もその仲間も居なかつた。初江はもう擬として居られなかつた。
初江は人温みをかき分けて外に出た。そして五十治の居る坑内に向つて男の子のように走り出
した。途中幾人も此方にかけて来る鉦夫たちと摺れちがつた。

「お父さん、大変なことになつたもだしな」

誰かがうしろから声をかけた。兼松は立停つて暗い中にその顔をさがした。

購買の前は鉦夫たちの人ばかりで一杯であつた。ヒリヒリと寒い夜の空気の中に群衆はひしひし
寄り合つていた。購買の入口から漏れる微かな光りの中に、鉦夫たちの引き緊つた顔が一つ一つ
浮き上つて見えた。兼松はすぐ近くに筋向いの長屋の作次郎の昂奪した微笑を浮かべた顔を見出
した。兼松はあたりに聞えよがしの大声で叫んだ。

「当り前だよ、購買とお上とは同じ穴の狸だべせ、黙つて居たら際限ないからな」

その声は周囲に同じような叫び声の渦をつくつた。

「ひと月の間に二度も三度も米の値上げるつて話あるものでねえ」

「その癖まるでコザキ米（粉米）でねえがよ」

「どんな安米だか分るものでねえ」

兼松はまた何か叫ぼうとしたが、うまい言葉が見当らなかつた。いや兼松は言つていい事と悪
いことのあることに気がついた。兼松はどう振舞つたものか当惑して凝と考え込んだ。と兼松は

一時間前まで人の顔さえ見れば組合に這入ることをすすめて歩いて居た自分に気がついた。それをどうして忘れて居たんだろう。兼松は自分で自分が可笑しくなって笑い出した。

直き兼松は人混みを掻き分けて知った顔を探して歩いて見た。見つかるはずぐその後尾いて行って声をかけた。

「七蔵、お前組合さ這入らねが、こういう事ってものは皆組合さ這入って、皆して意見を持ち出して一緒にやらねばいけねえもんだとよ」

「お父さんも這入ったのけ、そだば俺も這入るし」

七蔵は答えた。

「這入るか、それあよかったな、そだばな、みんなさそう言って歩いて呉れ」

硝子の砕ける音がした。何処からともなくバラバラと石が飛んだ。

「おい誰だ、乱暴すると承知しねえぞ」

その声と一緒に購買の建物に近く、烈しい罵り声や喚き声や叫び声が起った。それまで擬と闇の中に澱んでいた群衆はざわめき出した。ずっと後ろに居る鉞夫の群は、波立ちながら前の方に押し出して行った。喚きや罵り声は中々やまなかつた。不安な空気が漲った。それは急を聞いてかけつけたゴロツキどもの到来を知らせた。

「吉右衛門を出せ」

「やっつけれ」

「狸爺を引ッ張り出せ」

「ぶっつぶせ」

騒音が刻々たかまつて行つた。

メリメリと木の折れるような音が薄気味悪く寒い空気をふるわして響いて来た。叫び、喚きの中には悲鳴も混つた。木片や石が方々から飛んだ。

がそれ等のはつきりした目的に集中されないやけくそな荒んだ喧騒の中に、冷静な意志のある声が響きはじめた。

「お前方、やめれ」

「皆して相談してからにせ」

「話を決めねばいけねえ」

「川上の広場さ行け」

声の主はみんな急がしく彼方此方に駆け廻りながら叫んでいた。それ等の声は共通したある響きに依つて他の声から区別された。五十治たちを坑内から探し出して来た初江は、空腹も寒さも忘れて「お父さんお父さん」と叫びながら兼松を探し求めて歩いて居た。

しゃがれた声で何か熱心に叫んでいる声の主を、一群の鉋夫がとりまいて居た。初江は鉋夫たちの中に割り込んで覗き込んだ。微かな光りが心持ち腰の屈んだような老人の姿を見せた。話しているのは息子の芳松がハツパで死んでから熱心な組合員の一人となつた兼松であつた。

「いいかお前方わかつたか、組合さ這人らねば何も出来ねえや。米も安くならねえし、稼ぎ錢も高くならねえ、世の中は何うにもならねえ。嘘だと思つたら五十治さ聞いて見れ、お前方一人一人で事務所さ行つてお願い申したつて何にもならねえとせ、皆一緒にならねばいけねえとせ

……」

鉦夫たちの眼は芳松が死んで以来、すっかり息子のあとを引き受け、まるで様子の変わった兼松の可笑しい程一生懸命な顔に注がれていた。初江はこういうところで組合員の獲得をやっている兼松がひどく可笑しく、思わずふき出してしまった。

鉦夫たちはそれが二、三日前まで自分たちの子供の先生であった初江であるのを見た。初江は息せいで言った。

「お父さん、組合のこと後でいいから、皆に相談するから川上の広場さ行って呉れって頼んで呉れせ」

「ハイ来た」

兼松は気軽に答えた。そして直ぐそれを大きな声で触れ廻って歩いた。

六

日が落ちたばかりというのに長屋という長屋は戸をしめて居た。また今夜一騒動起きるに違いないという暗さが町に拡っていた。人影のないひっそりとした通りを雪もよいの風が寒々と吹き抜けて行った。

遙か川上の方角に篝火が赤々と燃え立って居た。そっちから蜂の唸りのような騒音が静かな町に伝って来た。

争議本部の長屋の一棟は鉦夫たちで一杯になって居た。所々に起った噂やストライキの今後のなり行きについて皆は騒々しく話し合った。坑内の電気部に働いて居る正二が片隅で謄写版にか

かっていた。「起て全山の諸君」という冒頭に始つたストライキ宣言や檄文が周囲の壁に所かまわず貼つてあつた。半分へシ折られた障子や大きな穴の明いた壁や壁の焼けこがしは、昨日の鉤山主側のゴロツキどもの襲来を物語つていた。すべてこれ等の地震のあのような光景は一層ストライキの空気を濃厚にしていた。たきだし初江は流し元で女房たちに交つて警備隊の炊出を手伝つていた。働きながらも初江は、其処から二十間とは離れていない川岸に近く、赤々と燃え立っている篝火の方に眼をやることを忘れなかつた。

火の子を散らしてバシバシ勢いよく燃え上る火は、胸の空く程す気持よく美しかつた。一つ一つの篝火の周囲には、争議の前と後とではまるで表情の変つた鉤夫たちの顔が一つ一つ見分けられる程はつきり闇の中に浮いて見えた。初江はその中に磁石のような敏感さで、繃帯で右腕を釣り下げた五十治の姿を見出した。

初江の胸は、何か知れない不安でワクワクした。が今は恐ろしいという気はしなかつた。この二、三日間の出来事がめまぐるしく初江の脳裏を往来した。

購買の前から川上の広場へ移動した群衆は、五十治や兼松たちの必死の努力にも拘わらず、小頭どもに攪乱されてどうにも纏りを見せなかつた。仕舞いに群衆は烏合の衆として散つて了つた。翌る日町の岩蔵たちの同志が、岩蔵を除き四人秘かに入山した。岩蔵だけ残つてあちこちの鉤山争議で経験を経て来て居る山部鉄男を迎え、一緒に入山することに手筈がきまつた。その夜この四人と五十治たち数人は、夜更けてから各方面に分れ長屋から長屋に檄文や宣伝ビラを配布して廻つた。一同は無事に帰つた。が五十治だけが姿を見せなかつた。不安な夜が明けた。何処からともなく五十治が数人の小頭に捕えられ半殺しにされたことが聞えて来た。十数名の同志は五十

治奪還に出かけた。全身蒼黒いむくみの出た五十治が戸板に乘せられて運ばれて来た。夜が明け
るまでツルの柄で殴られながら、壁一重へだてた請願巡査派出所で帯剣サイベルのガチャガチャという音
を幾度も聞いたと五十治は言った。

初江は五十治を見た瞬間、泣きながら万事お終いだと思った。がこのことは忽ち長屋から長屋
に伝えられ、全山の鉱夫の耳を鉄砲玉のように貫いた。町から来た四人を先頭に、同志の群は各
坑内に潜入して行つた。初江だけは坑口の外に残つて、息を詰めてその結果を待つて居た。初江
の眼から涙が流れた。松三郎を先頭に鉱夫の長い列が坑道からあふれて来た。初江は列に加つて
歩き出した。昂奮からト口道の枕木に躓いて転び、また起き上つて歩いた。彼方此方の坑口から
鉱夫の列がうねつて来た。精錬所や撰鉱場は空虚になつた。熔鉱炉の大煙突の煙は、鼠の尻ツポ
のように微かになつて行つた。

町の上には広々とした空が見えて来た。夕方に近い一とき、雲切れがして気持のいい青空が顔
を出し、キラキラした光りが漏れ、それが長屋の軒や路の上を照らした。数十年来煤煙で見るこ
との無かつた広々とした大空を鉱夫たちは声を上げて叫びたいような喜びと物珍らしさで見上げ
た。夜、警官隊が入山した。三日目の夜、ゴロツキの一隊が、倶楽部で振舞酒を喰つた揚句、一
杯機嫌で争議団本部になだれ込んだ。障子がヘシ折れ、壁がくだけ、土瓶や炉の灰が飛んだが、
鉱夫たちの必死の防衛はゴロツキどもの奪取から五十治その他を救つた。坑口や精錬所の壁に
「如何なる種類の要求を出しても事務所は受付ける意志が無い、即刻入坑しないものは馘首する」
という意味のビラが貼り出された。がそれは却つて坑夫たちの結束をかためることに役立つた。
五十治は棒切れで焚火をかき立てながら言った。

「お父さんは行くのやめれせ、若いものだけ行く方がいいよ」

方事に世話好きな兼松は、此処でも本性を出して自説を曲げなかった。

「そだって余り小人数だばいけねえぜ、先刻倶楽部で飲んでいた奴ども三、四十人も居たから、十人や二十人では何うにもならねえべせ」

警備隊の鉦夫たちの顔が集つて来た。皆は二人の顔を見くらべた。ゴロツキどもが事あれかしと望んでいることは分り切っていた。で警備隊が山部と岩蔵の護衛するに当って、ゴロツキどもとの争いを避けないことには、まんまと彼等の術策に落ちるに等しかった。そこで最初五十人と決めた繰り出しは十人に変更された。

五十治は穏やかに言った。

「兎に角入山すればそれでいいなだから、十人で沢山だすべ。足の早いものばかり十人……まずお父さんは残つて居れせ」

「そだか、そだらそれでもいい」

兼松はがっかりした様子で言った。

「用意出来たして」

初江が出て来て炊出の出来たことを知らせた。繰出しに選ばれた若者たちは長屋に這入つて行った。

十数年前まで採掘されて居た牛の背のような禿山を昇り切ると、突然闇に透して遙か下に一群の篝火たいまつが見えた。それが其儘流れに映つてチラチラ揺れているのが美しかった。岩蔵は思わず飲

喜の声を上げ一散に走り出した。い衝動を感じた。

「あれだ、走るすか」

岩蔵と山部は駆け出した。が直きに先に立った山部がピタリと立ち停った。多勢のガヤガヤいう話し声と此方へ近づいて来る登音が聞えた。

「小頭どもじやないかな」

山部が落着いた声で言った。

「仲間だすべ。小頭どもならかくれて居るにきまつて居るす」

話し声と登音は段々近づいて来た。多勢の黒い姿が闇を透して見えた。二人は思わず立停った。岩蔵は声をかけようとして躊躇した。向うの声が叫んだ。

「其処へ来るのは誰だ」

「山部だ、山部鉄男だ」

山部の幅のある声が響いた。と無数の黒い影がバラバラと押し寄せて来た。どの位の人数か見当がつかなかった。

「何しに来た」

その声と一緒に。ピシリと一撃岩蔵の背中に来た。岩蔵は棍棒を振り廻わして応戦した。が相手の攻撃は不思議に段段弱められた。そして四方から二人をとりまいた。

山部は呶鳴った。

「一体何うしようてんだ」

「いやア山部さん、ここはほかの鉱山とはちよつと訳が違いますぜ、こんなところへやって来て

貰つては困りますよ」

頭らしいのがイヤにおとなしく出た。

両方から腕をとられた山部と岩蔵とを中心にして、ゴロツキの一隊は今来た路をとって返した。連絡を失わないために岩蔵は大きな声で山部を呼び続けた。山部の返事はすぐ近くから、またズツと向うから響いて来た。が暫らくするとこの一隊は立ち停った。ざわめきが起った。不安な空気が闇のなかに漲った。岩蔵は仲間の来たことを感じた。

あちこちにバラバラにひろがったゴロツキの一隊の中に、弾丸のように鉋夫の一隊が飛込んで来た。岩蔵は自分を呼ぶ声を聞いた。ゴロツキから体を振りもぎって岩蔵はその声の方にかけて。仲間は十人そこそこだった。岩蔵は自分の耳に口を寄せて呟く声を聞いた。

「山部さん、此処に居るから安心だで」

ゴロツキどもは鉋夫の一隊を遠巻きにしてにじり寄って来た。岩蔵は今更のように相手の多数なのに気付いた。

「みんなかたまつて一直線に走れ」

岩蔵は闇の中に眼を輝やかせながら耳から耳に言葉を押し込んだ。

「たたきのめせ」

「やっつけろ」

相手は四方からジリジリ寄せて来た。戦闘の前の殺伐な重苦しい空気が凍てついた風と一緒に押し寄せて来た。がその瞬間「そらッ」というかけ声と一緒に、坑夫の一隊は無数のゴロツキの包囲した一角を烈しく突き破って馬車馬のように飛び出した。

飛び出す瞬間、岩蔵は体のあちこちに烈しい打撃を感じた。女房たちが裏山の菜っ葉を取りに行く時だけ通る足跡がかすかについているに過ぎない路は直に見失われた。仲間の一隊は岩に蹴躓^{けつまず}いたり、転んだりしながら、禿山の下り路を滅茶苦茶に走った。闇の中の篝火は段々と近づいて来た。その篝火の周囲にはまた次第に仲間の無数の顔が見え出した。

底本.. 「日本プロレタリア文学集・10」新日本出版社

1985（昭和62）年11月25日 初版

初出.. 「文藝戦線」

1929（昭和4）年4月号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2012（平成24）年4月12日